

主体的に学びに向かう力を育むための指導の手立て
～小学校音楽科における歌唱指導の実践を通して～

宮崎市立恒久小学校
教諭 酒匂 美貴子

目 次

I	研究主題	1 - 1
II	主題設定の理由	1 - 1
III	研究目標	1 - 1
IV	研究仮説	1 - 1
V	研究内容	1 - 2
VI	研究計画	1 - 2
VII	研究構想	1 - 3
VIII	研究の実際	1 - 4
1	理論研究	1 - 4
(1)	主体的に学びに向かう力	1 - 4
(2)	児童による課題解決を意識した学習過程	1 - 4
(3)	学ぶ意欲を持続させるための自己評価	1 - 6
2	検証授業	1 - 9
(1)	検証授業 I・II の実際	1 - 9
(2)	指導の実際	1 - 10
(3)	考察	1 - 14
(4)	意識調査の分析	1 - 17
IX	研究の成果と今後の課題	1 - 19
1	研究の成果	1 - 19
2	今後の課題	1 - 19
	参考・引用文献等	1 - 19

I 研究主題

主体的に学びに向かう力を育むための指導の手立て
～小学校音楽科における歌唱指導の実践を通して～

II 主題設定の理由

情報化やグローバル化といった社会的変化が加速度的に進展し、将来の予測が困難な時代において、「生きる力」を育むという理念はますます重要になっている。その中で一人一人に求められるのは、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、主体的に学び続けて自ら能力をのびし、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことである。それを可能にするためには、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合っ

て関わり合おうとする意欲が重要となる。
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（平成28年12月／答申）」においては、学校教育を通じて子供たちに育てたい姿として「変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」と示している。このような姿を指導者が育成していくためには、子供たちが主体的に問題を捉え、解決しようとする意欲を向上させるための学習過程や評価を工夫することが重要であると考えられる。

県では学力向上のための取組を推進し、様々な学校で校内研究の在り方や授業研究の進め方等の研修が進んでいる。所属校では昨年、「教えて考えさせる授業」を目指し、全職員で教える段階・考えさせる段階を明確にし、学力向上に向けた授業改善に取り組んだ。自らが担当する音楽の歌唱指導では、習得したことを新しい楽曲でどのように活用するかを考えさせ、グループ活動による話し合いや練習をさせ、表現の工夫をさせた。活動の中で児童が課題解決のために、身に付けた知識や技能を活用しようと練習を重ねる姿が見られ、自分たちの思いや意図を歌声として表現するができた。しかし、教師が与えた課題の解決に向けて試行錯誤するグループ活動においては、全員が主体的に取り組んでいたとは言い難かった。自分自身の研究結果も含め、研究全体としては、まとめの時間の振り返りの不十分さや、振り返りの方法の曖昧さという課題があった。児童の姿においても、自分自身の課題を意識していなかったり、受身的な学習活動になっていたり主体的に学ぶ姿は多く見られなかった。

ここまでの課題を改善するためには、これから必要とされる、主体的に問題に向かい、解決するために試行錯誤しながら学び続け、新たな価値を創造したり、新たな問題を発見・解決したりする力の育成を進めなくてはならない。そのためには、教師が一方的に課題を提示するだけでなく、児童に自分自身の課題を意識させ、その課題を解決させながら、「何ができるようになって、何が課題であるか」を把握させることが重要であり、学ぶ意欲を継続させることが必要であると考えられる。

そこで、主体的に学びに向かう力を育むための指導の手立てを研究する必要があるのではないかと考え、本研究では、理論研究として、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の中の、特に「主体的に学ぶ力」について整理する。そして、音楽科において、児童による課題解決を意識した学習過程を明確にし、学ぶ意欲を継続させるための自己評価の在り方について究明する。検証授業については、第6学年の歌唱の題材で行い、理論研究において究明した指導の手立ての有効性について検証する。

III 研究目標

小学校音楽科における歌唱指導の実践を通して、児童による課題解決を意識した学習過程や、学ぶ意欲を持続させるための自己評価について工夫・改善し、その手立ての有効性を検証する。

IV 研究仮説

児童による課題解決を意識した学習過程や、学ぶ意欲を持続させるための自己評価について工夫・改善すれば、主体的に学びに向かう児童の育成が図られるであろう。

V 研究内容

1 理論研究

- (1) 主体的に学びに向かう力
- (2) 児童による課題解決を意識した学習過程
- (3) 学ぶ意欲を持続させるための自己評価

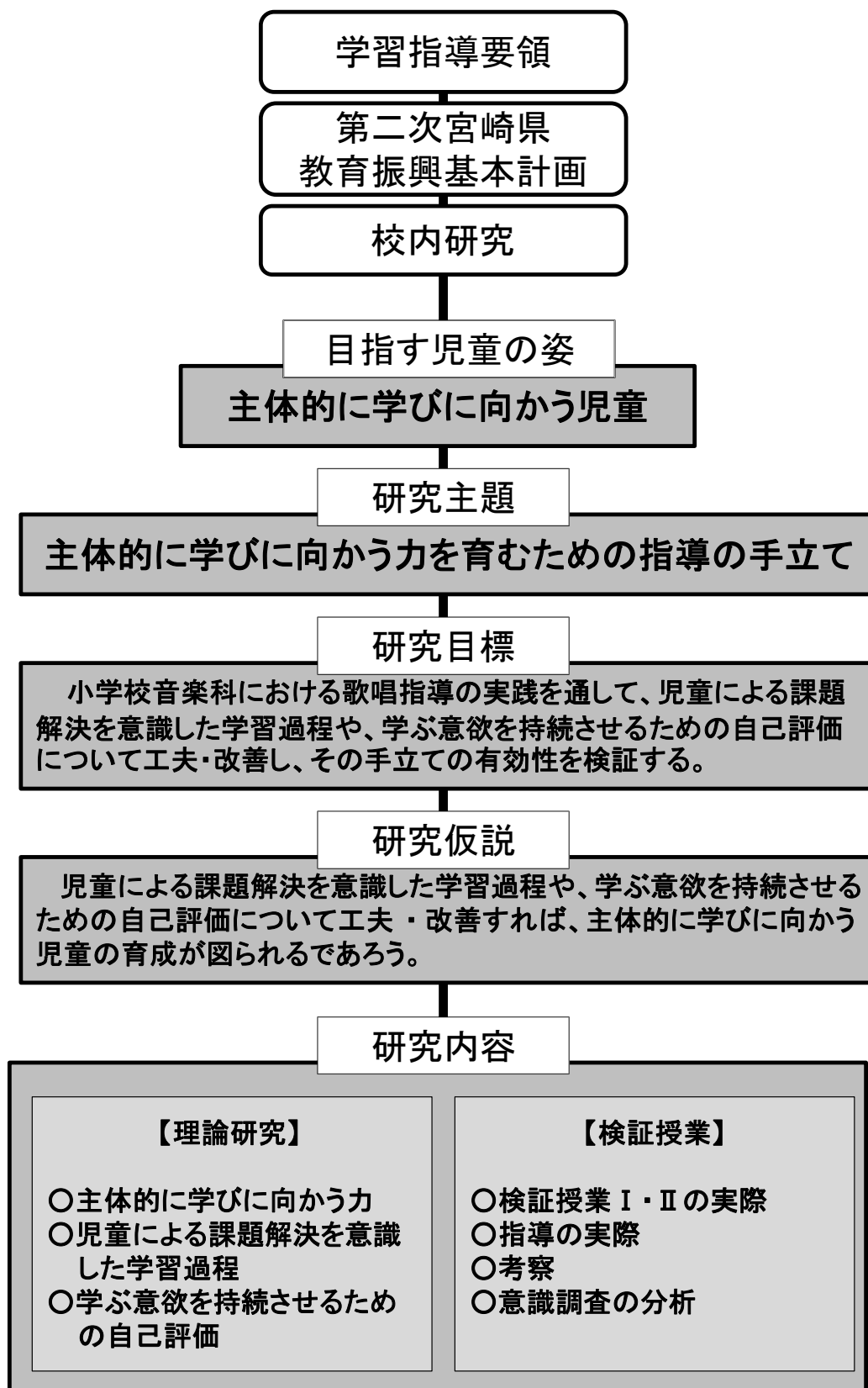
2 検証授業

- (1) 検証授業Ⅰ・Ⅱの実際
- (2) 指導の実際
- (3) 考察
- (4) 意識調査の分析

VI 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法
4	○研究の方向性	○研究主題・副題・仮説等の設定	○文献研究
5	○研究の方向性 ○理論研究 15日 課長ヒア	○研究内容・研究計画の設定 ○理論の構築	○文献研究
6	○理論研究 ○前期協議会に向けた準備	○理論の構築、研究概要の設定 ○意識調査（児童の意識） ○前期協議会に向けた資料作成	○文献研究 ○アンケート調査
7	7日 前期協議会 ○検証授業Ⅰの構想	○前期協議会のまとめ ○協議会後の修正 ○検証授業Ⅰの学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
8	○検証授業Ⅰの構想	○検証授業Ⅰの学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
9	○検証授業Ⅰの実施 ○検証授業Ⅱの構想	○検証授業Ⅰの実施と分析 ○検証授業Ⅱの学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
10	○検証授業Ⅱの実施	○検証授業Ⅱの実施と分析	○文献研究
11	○全体協議会に向けた準備	○全体協議会の資料・プレゼンテーションの作成	○文献研究
12	13日 全体協議会 ○研究のまとめ	○全体協議会のまとめ	○文献研究
1	○研究のまとめ	○研究報告書の作成	
2	○研究のまとめ ○主題研究発表会に向けた準備	○パネルの作成	
3	9日 主題研究発表会	○主題研究発表会の資料・プレゼンテーションの作成	

VII 研究構想



VIII 研究の実際

1 理論研究

(1) 主体的に学びに向かう力

今回の学習指導要領の改訂では、「知・徳・体にわたる『生きる力』を子供たちに育むため、『何のために学ぶのか』という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理」し、「何ができるようになるか」を明確化している。

その3つの柱のうちの1つである「学びに向かう力、人間性等」については、「論点整理」の中で「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力をどのような方向で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、（中略）自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる『メタ認知』に関するもの」と記されている。

この内容を基に、本研究における「主体的に学びに向かう力」は、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力」であり、「客観的に自分自身の学びを捉える力」を要するものとする。

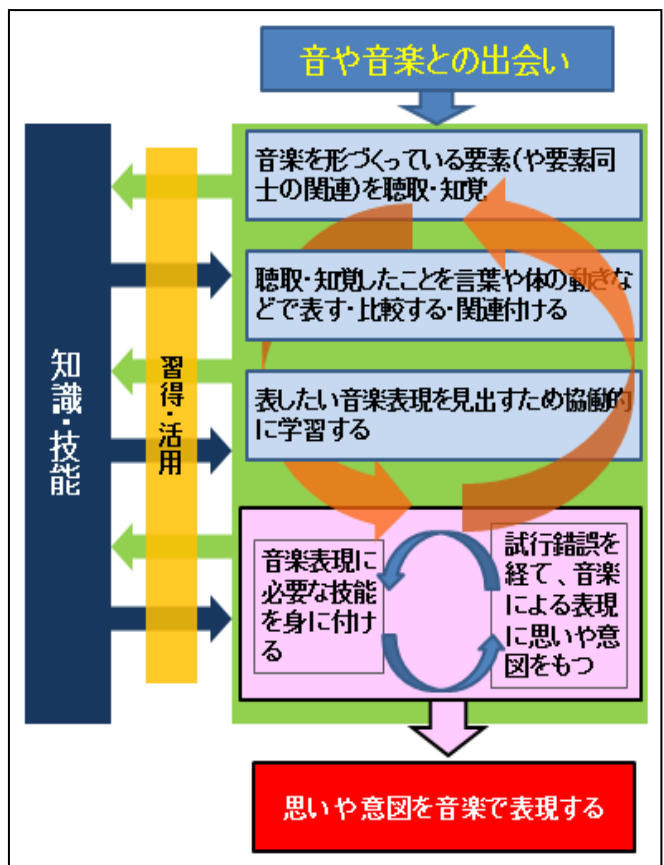
(2) 児童による課題解決を意識した学習過程

ア 音楽科の表現領域で求められる学習過程

表現領域の学習では、思考・判断の過程との関連を図りながら、自分で音楽表現をしたり、友達と一緒に音楽表現をしたりしながら、自分の思いや意図を音楽で表現するための技能を習得・活用できるようにすることが重要である。また、その実践を積み重ねることによって音楽的な「見方・考え方」を成長させ、表現や鑑賞の学習を深めていくことも重要となる。このことを、「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」の中で学習過程のイメージとして図で示している。それを参考に表現領域の学習過程のイメージを【図1】にまとめた。

表現領域については、学習を進めながら、知識・技能の習得と活用を行き来させる。また、様々な音楽的スキルの中から、創意工夫を生かした音楽表現に必要な技能を身に付けることと、試行錯誤しながらどのように音楽で表現するかについて思いや意図をもつことを繰り返すことを通して、思いや意図を音楽で表現することが可能になる。この試行錯誤しながら必要な技能を身に付ける活動の繰り返しによる質の高まりによって学びが深まる状態が、音楽科における探究であると考えられる。そして、この学習過程全体を通して児童による課題解決を図るためには、主体的に学びに向かう力を育成していくことが求められる。

【図1 表現領域の学習過程イメージ】



イ 歌唱指導における学習過程

児童による課題解決を意識した学習過程を踏まえた上で、音楽科の表現領域に求められている学習過程を捉えると、歌唱指導においては、次に示す学習過程が効果的であると考えられる。

【表1 歌唱指導における主な学習と活動状況、習得・活用・探究イメージ図】

段階	1	2	3	4
主な学習内容	新しい曲がどのような曲かを考える。 (場面・様子・楽譜の読み取りなど)	楽譜どおりに歌えるように練習する。 (音の高さや長さ等に気を付けて歌う)	友達と思いや意見の交流をしながら表現の工夫を考え、繰り返し歌って練習する。(グループ活動も含む)	自分たちの歌声を聴き、さらにどうすればいいか試行錯誤しながら仕上げる。 (グループ活動も含む)
活動状況	○ 既習事項の確認と活用	○ 新しい知識・技能の習得と活用	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価 (聴き合い・録音等)	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価 (聴き合い・録音等)
習得・活用・探究イメージ図				

ウ 学習活動を支える〔共通事項〕について

【表1】にまとめた学習過程を通して課題解決に向かいながら主体的に学びに向かわせるためには、一人一人が根拠をもった考えを基に対話することが重要となる。ペアやグループで表現の工夫について考える活動を設定する際、根拠となる知識を基に思いや意図を述べさせなければならない。

音楽科においては、表現及び鑑賞の内容が、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の活動の4つに分かれている。それらの全ての活動において共通に指導する内容を、各活動の指導事項の内容と区別して〔共通事項〕として示している。「小学校学習指導要領音楽」に示しているものを【表2】にまとめた。

【表2 小学校学習指導要領 音楽〔共通事項〕】

ア 音楽を形づくっている要素	イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語
(ア) 音楽を特徴付けている要素	(イ) 音楽の仕組み
<ul style="list-style-type: none"> 音色 リズム 速度 旋律 強弱 音の重なりや和声の響き 音階や調 拍の流れやフレーズ 	<ul style="list-style-type: none"> 反復 問いと答え 変化 音楽の縦と横の関係

グループ活動での意見交流や学び合いにおいて、音楽における〔共通事項〕を根拠とした対話ができることが、児童による課題解決を可能にするために必要であると考えられる。

普段の授業において、〔共通事項〕アについては、「音楽をいろいろと味付けできる調味料のようなもの」として子供たちに捉えさせるために、「音楽の調味料」というネーミングにして示している。〔共通事項〕イについては、フラッシュカードを作成している。各学年の系統性を考え、また、学習内容に合わせて、授業の導入で活用し、短時間の学習を繰り返すことによって、定着を図っている。

本研究において、〔共通事項〕アについては、「音楽の調味料」カードをいつでも目視確認できるようにコーナーを設けるとともに、課題を考える時のキーワードとして提示したり、課題解決のための話し合いの視点、友達や自分たちの歌声を聴く際の視点として提示したりする。〔共通事項〕イについては、これまでの学習の積み重ねがあるため、授業の中ではフラッシュカードを用いず、楽譜の読み取りの際に確認していく。

(3) 学ぶ意欲を持続させるための自己評価

ア 自己評価の重要性

先述した答申において、「『子供たちにどういった力が身に付いたか』という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められる。」と示されている。また、子供たちの学習状況の評価については、「教員は、個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけではなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要である。」とある。評価の具体的な方法等についての説明の中には、『主体的に学習に取り組む態度』については、(中略)子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。」とある。このことから、児童の学ぶ意欲を持続させるための評価として、自己評価の工夫・改善に取り組むことは重要であると考えられる。

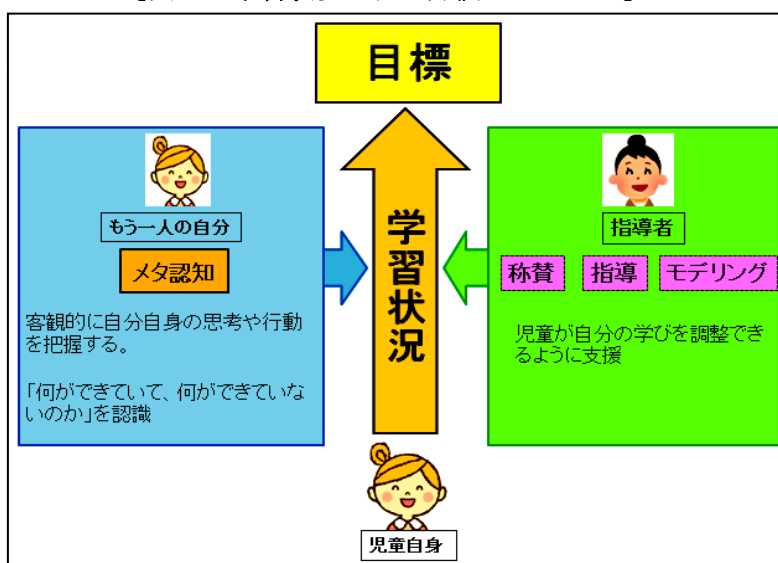
イ 学習状況の自己評価

認知心理学者の和田秀樹氏は、メタ認知を高めるためには「子どもの性格や性質をよく理解し、保護者や教師が、『どうしてそう考えたの?』というような働きかけをし、小さな成功体験を重ねるといった動機付けにより、学習意欲や向上心を高める」ことが重要であると述べている。

学習状況の自己評価のイメージを【図2】に表した。自己評価を行うにあたって児童のメタ認知が不可欠である。

また、同時に、教師は児童が行った評価に対してアドバイスや称賛を行い、児童が自分の学びを調整できるように支援する必要がある。

【図2 学習状況の自己評価のイメージ】



ウ 自己評価カードの作成

児童自らが学習の目標をもち、学習の進め方を見直すなど、学ぶ意欲を持続させるために自己評価カードを作成した。作成の際に留意した視点と作成する際のポイントを【表3】にまとめた。

【表3 自己評価カード作成の視点と作成する際のポイント】

自己評価カード作成の視点		作成する際のポイント
①	目指すゴールが明確になっていること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 題材（単元）目標を確認する。 ○ 教師が何を身に付けさせるのかを明確にして設定する。
②	児童が自分自身のめあてを設定できるものであること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分自身のめあてを選択させるために、複数のめあてを分かりやすい言葉で書く。 ○ 児童に学びの見通しをもたせるために、学習内容と関連付ける。
③	評価する観点が児童に伝わること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各学年の実態や系統性を考え、項目を立てる。 ○ 教師の行う評価との関連を考えて、自己評価の項目を示す。 ○ その題材（単元）の学習に必要な「学習用語」を文言の中に入れる。
④	学習活動の反省ができ、次の課題をもたせられるものであること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童一人一人の実態や思い、課題を具体的に把握する。 ○ 意欲の度合いを可視化するために、自己採点の枠を設ける。 ○ 教師が学習状況を捉えるために、採点の理由の記述欄を設ける。 ○ 新たな課題や次の学習への意欲を記述する欄を設ける。
⑤	教師がアドバイス・称賛を行い、児童の内面に働きかけるものであること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 客観的な評価を行い、次への意欲付けを図るために、教師のコメント欄を設ける。

この5つの視点で作成した自己評価カードで振り返らせることが、児童の意欲を引き出し、その意欲が主体性を支えることになると考えた。前述の5つの視点を自己評価カードの作成の際、どのように活用したかを【図3】にまとめた。

【図3 5つの視点を活用した自己評価カード内の項目】

① 目指すゴール	② ゴールを目指すために 今日がんばることに〇をしよう。	ふり返り	④ 反省と次がんばること 先生からのアドバイス
曲のふん囲や曲名や曲調を歌で表現するよじだんげん。	表情やしせいに気をつけて歌う。		【録音を聴いた感想】
	せんりつのみとまり【フレーズ】を意識して、フレスの仕方に気をつけて歌う。		
	歌詞の内容や曲のふん囲気からイメージした歌い方の工夫を考える。		【今日は100点満点中 何点？】
	歌詞の内容と曲のふん囲気にふさわしい声を考え、声のひびきを意識して歌う。		点
	曲のふん囲にあった強弱の表現の仕方を考え、工夫して歌う。		【100点にするために次がんばること】
	友達と声を聞き合ったり、教え合ったりして協力して練習する。		【先生からアドバイス】
	表現したい歌い方に近づくように、練習をくり返し、ゴールを達成する。		

エ 客観的に評価させるための手立て

児童が自己評価を行う上で、主観的な評価になることを避けるために次の3つの手立てをとることにする。

- ① ICレコーダー等のICT機器を使用し、録画・録音を行い、自分たちの歌う姿や歌声を鑑賞させ、客観的に評価させる。
- ② グループ活動による学び合いや練習の成果発表といった、相互評価の場面を設定する。
- ③ 教師によるモデリングや声かけ、称賛によって、客観的な視点を意識させる。

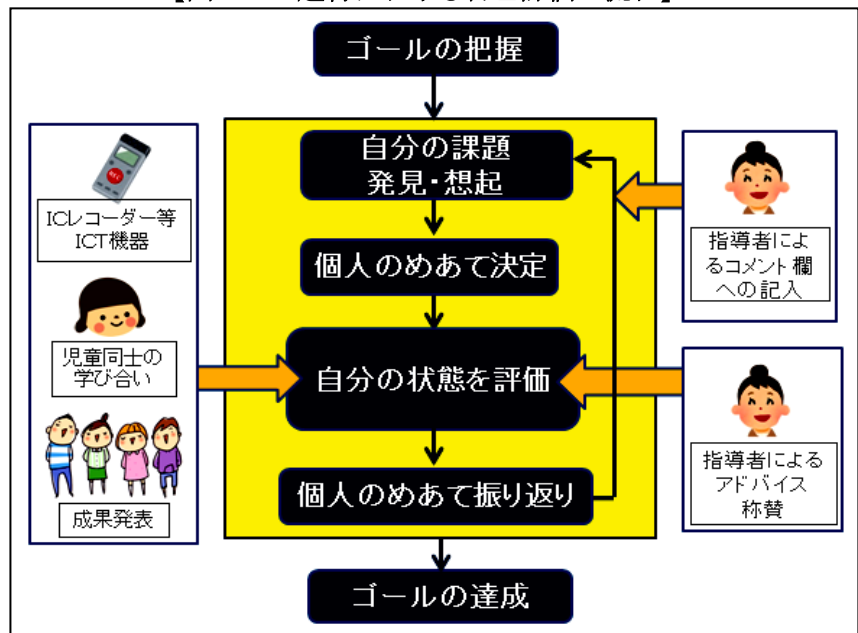
オ 主体的な学びにつなげる自己評価カードの活用

自己評価カードは、授業前の児童の状況把握と児童自身のめあての設定授業後段では児童一人一人の振り返りに活用することを考えて作成した。

自分の学習状況を評価するには、活動状況や必要に応じて客観的に評価させるための手立てを設定する。

児童が記録した自己評価カードは授業後に集め、教師がアドバイスや称賛のコメントを書き込み、次の学習の意欲付けや課題の発見、めあての設定につなげることで、主体的な取組につなげるようにする。

【図4 1題材における自己評価の流れ】



2 検証授業

(1) 検証授業Ⅰ・Ⅱの実際

検証授業の題材の流れを、本資料P5の【表1】に合わせて【表4】にまとめた。検証授業Ⅰは、第6学年「われは海の子」全2時間、検証授業Ⅱは、同じクラスで「ふるさと」全4時間である。

検証授業Ⅰ「われは海の子」は斉唱、検証授業Ⅱ「ふるさと」は合唱となるため、表現の工夫の場と探究の場でのグルーピングの仕方を変えた。

【表4 習得・活用・探究の学習過程に合わせた検証授業Ⅰ・Ⅱの題材の流れ】

段階	1	2	3	4
主な学習内容	新しい曲がどのような曲かを考える。 (場面・様子・楽譜の読み取りなど)	楽譜どおりに歌えるように練習する。 (音の高さや長さ等に気を付けて歌う)	友達と思いや意見の交流をしながら表現の工夫を考え、繰り返し歌って練習する。(グループ活動も含む)	自分たちの歌声を聴き、さらにどうすればいいか試行錯誤しながら仕上げる。(グループ活動も含む)
検証授業Ⅰ	第1次 【主な学習活動】 歌詞の内容を理解し、情景を想像しながら歌う。 【めあて】 歌詞の意味を知って、情景を思い浮かべながら歌おう。	第2次 【主な学習活動】 自分たちの課題や改善点を明確にし、友達と意見交流をしたり聴き合ったりしながら練習を繰り返し、思いや意図を歌で表現する。 【めあて】 情景に合う強弱をつけて歌を仕上げよう。		
検証授業Ⅱ	第1次 【主な学習活動】 楽曲全体の感じをつかみ、主旋律を歌う。 【めあて】 歌詞から情景を思い浮かべて歌で表現しよう。	第2次 【主な学習活動】 歌詞の情景や思いを表現するために、工夫したい点や改善したい点を話し合いながら練習する。 【めあて】 各パートに分かれて、表現の工夫をして練習しよう。	第3次 【主な学習活動】 自分たちの思いや意図を表現できるように試行錯誤し、主体的に練習に取り組む。 【めあて】 2番の表現の工夫を考えて歌を完成させよう。	第4次 【主な学習活動】 自分たちの思いや意図をもった表現の工夫を生かして合唱を仕上げる。 【めあて】 「ふるさと」の合唱を完成させよう。
活動状況	○ 既習事項の確認と活用	○ 新しい知識・技能の習得と活用	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価(聴き合い・録音等)	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価(聴き合い・録音等)
習得・活用・探究イメージ図				

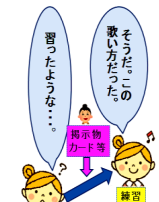
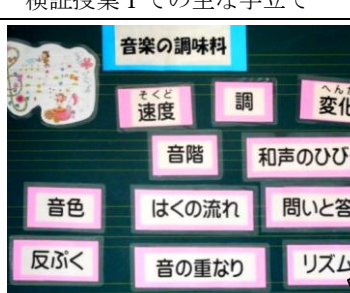
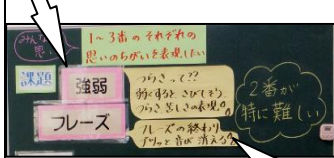
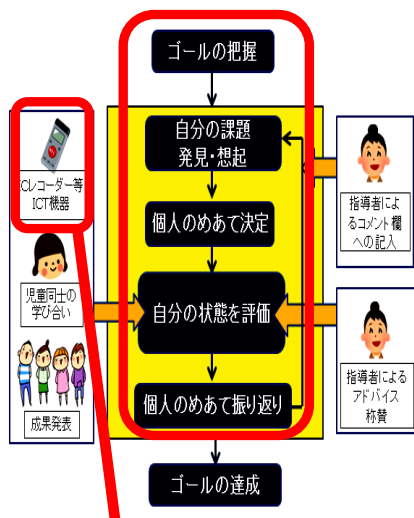
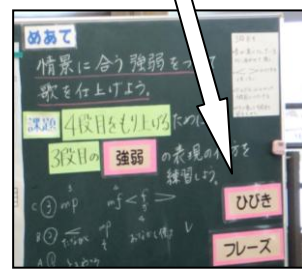
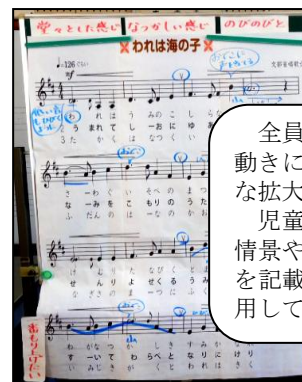
(2) 指導の実際

ア 既習事項の確認と活用の場における活動

a 指導の手立てと自己評価の流れと手立て

この段階での学習活動は「新しい曲がどんな曲か考える」ことであり、新しい曲と出会い、その曲の特徴等を捉えながら、その曲に込められている情景や思いを考えていく段階である。児童による課題解決を促す手立てや自己評価の流れと手立てを、【表5】にまとめた。

【表5 既習事項の確認と活用の場における活動】

【学習活動】		
1 新しい曲がどのような曲かを考える。		
検証授業Ⅰ「われは海の子」 検証授業Ⅱ「ふるさと」		
検証授業Ⅰでの主な手立て	検証授業Ⅱでの主な手立て	自己評価の流れと手立て
 <p>習ったような… 歌方だこの 指示物 カード等 練習</p>	<p>話合いの中での視点や根拠として活用できるよう「音楽の調味料」カードを常に提示した。板書には、学習内容に応じカードを選択して提示した。</p>  	 <p>指導者によるコメント欄への記入 指導者によるアドバイス称赞</p>
	<p>全員で歌詞や旋律の動きに注目できるように拡大譜を準備した。児童のイメージした情景や思い、その根拠を記載した拡大譜を活用して練習した。</p> 	<p>自分の課題発見・想起と個人のめあての決定をつなげるために、本時の課題を明確に示した板書を計画した。</p> <p>教師のスマートフォンでの録画とその鑑賞を行い、自分の課題の想起や個人のめあての決定に生かした。</p>

b 児童の様子

自己評価カードから学びのゴールを把握させ、どのような項目をめあてとして選び学習していけばゴールを達成できるのかを確認させたことで、題材の導入段階で見通しをもたせることができた。また、拡大譜を提示し、歌詞の意味を全員で確認したり、歌詞や旋律から気付いたことやイメージを書きこんだりすることで歌唱の学習の流れを想起させることができ、歌詞から情景をイメージしようと主体的に考える姿が多く見られた。

イ 新しい知識・技能の習得と活用の場における活動

a 指導の手立てと自己評価の流れと手立て

この段階での学習活動は「楽譜どおりに歌えるように練習する」ことであり、表現の工夫に入る前に教師とともに練習し、旋律を覚えて歌えるようになる段階である。児童による課題解決を促す手立てや自己評価の流れと手立てを、【表6】にまとめた。

【表6 新しい知識・技能の習得と活用の場における活動】

【学習活動】		
2 楽譜どおりに歌えるように練習する。		
検証授業Ⅰ 一斉指導 検証授業Ⅱ パート別での指導		
検証授業Ⅰでの主な手立て	検証授業Ⅱでの主な手立て	自己評価の流れと手立て
 <p>思いや意図をもって表現の工夫をするために必要な知識・技能の指導をした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旋律の動きを意識して歌うこと ・強弱の表現の仕方 ・声の響かせ方 等 	 <p>習得した知識・技能をどう活用したいのか、児童の思いを聴きながら指導した。</p>	 <p>ゴールの把握</p> <p>自分の課題 発見・想起</p> <p>個人のめあて決定</p> <p>自分の状態を評価</p> <p>個人のめあて振り返り</p> <p>ゴールの達成</p> <p>指導者によるコメント欄への記入</p> <p>指導者によるアドバイス・称賛</p>
		 <p>児童に客観的な自己評価をさせるために、教師によるモデリングと称賛を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「先生のものを見て。開いてる時と閉じてる時の声の違いはどう？」 ・「〇〇さんの姿勢がいいね。」 ・「〇〇さんの声がいい響きだね。もう一回歌ってもらえる？」 等

b 児童の様子

学習の見通しをもち、自分のめあてを選択して取り組んでいることで、この段階で何を身に付けるべきかを考えて学習していた。検証授業Ⅰにおいては、次時の活動である表現の工夫を見通した上で、この段階で必要である正確に旋律を歌う練習に、各自が歌に対する思いや意図をもって取り組んでいた。検証授業Ⅱでの、旋律を正確に覚える活動では、友達と互いに聴き合ったり、課題解決のために、自ら苦手な部分を友達に伝えて教えてもらったりする等、友達と積極的に関わりながら練習していた。

ウ 表現の工夫の場における活動

a 指導の手立てと自己評価の流れと手立て

この段階での学習活動は「友達と思いや意見の交流をしながら表現の工夫を考え、繰り返し歌って練習する」ことである。グループに分かれ、友達と協働しながら表現の工夫を考え、練習する場であり、教師は各グループの状況を見ながら、アドバイスや称賛を行う。児童による課題解決を促す手立てや自己評価の流れと手立てを、【表7】にまとめた。

【表7 表現の工夫の場における活動】

【学習活動】		
<p>3 友達と思いや意見の交流をしながら表現の工夫を考え、繰り返し歌って練習する。</p> <p>表現の工夫 思いや意図の 交流</p> <p>検証授業Ⅰ 3つのグループに分かれて表現の工夫を練習 検証授業Ⅱ 高音部と低音部に分かれて表現の工夫を練習</p>		
検証授業Ⅰでの主な手立て	検証授業Ⅱでの主な手立て	自己評価の流れと手立て
<p>自分たちの思いや意図をもって表現の工夫をするために必要な知識・技能の習得ができるよう、グループ活動では練習する視点を明確に示し、主体的な活動ができるようにした。</p>		<p>ICレコーダー等 ICT機器</p> <p>児童同士の 学び合い</p> <p>成果発表</p> <p>指導者による コメント箱 への記入</p> <p>指導者による アドバイス 称賛</p> <p>ゴールの把握</p> <p>自分の課題 発見・想起</p> <p>個人のめあて決定</p> <p>自分の状態を評価</p> <p>個人のめあて振り返り</p> <p>ゴールの達成</p>
<p>ICレコーダーを活用し、自分たちの思う表現の工夫に近づいているか、録音を聴きながら思いや意図の交流をさせた。</p>		
		<p>客観的に表現の工夫を評価するためにICレコーダーを活用させた。</p>
		<p>客観的に表現の工夫を評価するためにグループ活動内での相互評価をさせた。</p>
		<p>児童同士のグループ活動を支えるために、教師によるアドバイスや称賛を行った。</p>

b 児童の様子

グループ活動に入る前に、全員で取り組む課題を絞り込み、「音楽の調味料」カードで視点を提示したことで、各グループにおける活発な思いや意図の交流につなげることができた。練習の際は、ICレコーダーを活用して何度も聴き、自分たちの課題解決に向けて、話し合いながら意欲的に練習を繰り返すことができた。

エ 探究（試行錯誤）の場における活動

a 指導の手立てと自己評価の流れと手立て

この段階での学習活動は「自分たちの歌声を聴き、さらにどうすればいいか、試行錯誤しながら仕上げる」ことである。自分たちの思いや意図を歌で表現できるよう、練習の途中でICレコーダーを活用したり、友達と聴き合ったり、練習の成果発表を行ったりして、自分たちの課題を見つけ、解決するために試行錯誤する場である。そして、自分たちの歌を仕上げる場でもある。教師は各グループの状況を見ながら、アドバイスや称賛を行う。児童による課題解決を促す手立てや自己評価の流れと手立てを、【表8】にまとめた。

【表8 探究（試行錯誤）の場における活動】

【学習活動】		
<p>4 自分たちの歌声を聴き、さらにどうすればいいか、試行錯誤しながら仕上げる。</p> <p>  </p> <p> 検証授業Ⅰ 歌の情景に合う声の響かせ方や強弱の付け方の練習と仕上げ 検証授業Ⅱ 新しい課題の発見と解決に向けた練習と仕上げ </p>		
検証授業Ⅰでの主な手立て	検証授業Ⅱでの主な手立て	自己評価の流れと手立て
<p>  </p> <p>課題解決に向けて児童が思いや意図の交流を繰り返し練習できるような試行錯誤の場を設定した。</p>	<p>  </p> <p>試行錯誤する中で出てきた新しい課題を解決するために新しい知識・技能の習得の場を設定した。</p> <p> ・発声の仕方による表現の工夫 ・「子音」の発音の仕方 </p> <p>  </p> <p>新しく得た知識・技能を生かした表現の工夫を目指した練習の場を設定した。</p>	<p>  </p> <p>客観的に表現の工夫を評価するためにICレコーダーを活用させた。</p> <p>  </p> <p>各グループの練習の成果を聴き合い相互評価をする場を設定した。</p> <p>第1次の歌声と最後のまとめでの歌声を、録画を鑑賞して比較し、題材全体を振り返る場を設定した。</p> <p>題材全体を通したまとめを教師が行った。</p>

b 児童の様子

検証授業Ⅰでは、グループ活動の中で練習を繰り返しながら課題解決に向けての意欲が高まり、自発的にペアで向き合い、姿勢や声を確認し合う練習を取り入れ始めた。その際、相互評

価、他者評価による学び合いが自然な形で行われていた。検証授業Ⅱでは、録音を聴いては意見を出し合い、試行錯誤する中で、強弱の付け方を工夫するだけでは自分たちが意図する表現にならないという新たな課題にぶつかった。そこで、新しい知識・技能として、発声の際の「子音」の使い方による表現の変化を教師自身のモデリングを通して気付かせたことで、発音の仕方の工夫も視野に入れ、グループ練習を進めることができた。

(3) 考察

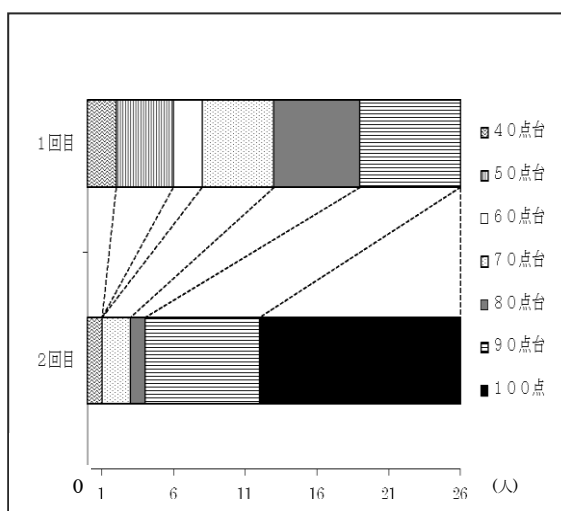
ア 自己評価カードの分析

a 自己採点の変化から見る達成感

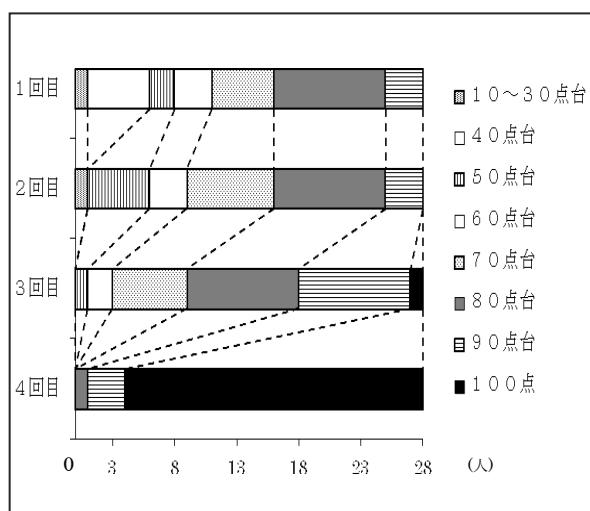
検証授業Ⅰの自己採点の変化【図6】を見ると、1回目の平均点が約70点、2回目は約87点であり、約17点の増加であった。

検証授業Ⅱの自己採点の変化【図7】では、1回目の平均が約69点、2回目が約72点、3回目が約83点、4回目は約98点となった。2回目は新たな課題にぶつかり悩んだ状態で授業を終えていたため、点数が上がらなかったと考えられる。

【図6 検証授業Ⅰの自己採点の変化】



【図7 検証授業Ⅱの自己採点の変化】



b 自己採点の理由

自己採点をどのような理由で行ったのかを知るために、最終日の自己採点の理由について、自己評価カードに挙げていた項目を基に質問用紙を作成して、児童の回答を集めた。

自己採点の理由として選択した項目別人数を【表8】にまとめ、自己採点の点数と選択した項目数を【表9】にまとめた。

自己採点をする際に、ゴールとなるめあての項目を意識して取り組ませた上で振り返らせたことで、児童自身が根拠をもって自己採点していた。【表9】からは、自己採点の点数が上がるにつれ、選択する項目数が増えており、児童ができた

【表8 自己採点の理由として選択した項目別人数】

項目	検証授業Ⅰ 選択人数 (26人中)	検証授業Ⅱ 選択人数 (28人中)
楽しく学習できた	18	24
自分の課題解決ができた	15	24
仲間と協力してグループ活動ができた	19	24
納得いく表現の工夫ができた	19	23

【表9 最終日の自己採点の点数と選択した項目数】

自己採点の点数	検証授業Ⅰ 選択した項目数	検証授業Ⅱ 選択した項目数
91～100点	平均3個	平均3.3個
71～90点	平均2.5個	平均3個
70点以下	平均2個	該当者なし

と評価した項目数を採点する際の根拠の一つとしていたと考えられる。採点理由の記述欄には、自分が選択したためあてに対しての振り返りが具体的に書かれていた。

また、自己評価カードを使った感想として、目指すゴールに向かって頑張るべきことが明確であったこと、振り返りをする際に前回の自分と比較しやすかったこと、といった内容を記録していた児童が約8割であった。自己採点とその理由を書かせることは、主体的に児童が学ぼうとすることにつながり、また、児童の学ぶ意欲を持続させることができ、効果があったと考える。

ここで気を付けておきたいのが、点数の高低のみで学習意欲の有無について判断することはできないということである。

検証授業Ⅰにおいて、2回目とも40点台を付けていた児童に注目すると、2回目の採点は1点のみの増加であったが、その理由には「自分に厳しくして、もっと上手に声を出せるようになりたいから」と記録していた。その児童なりに、どのように自分の力をのばしていきたいのか明確な考えがあり、学びへの意欲をもった上で採点したことが分かる。このことから、児童がどのような思いをもって採点したのかが分かるような記述欄を設けることで、児童の内面を把握し、点数の増減がもつ意味を踏まえて点数化されたデータを活用することが重要であるといえよう。

c. 自己評価カードから見る学ぶ意欲

○ 全体的な変化の分析

自己評価カードの記録から、児童の学ぶ意欲は、【図8】に示した部分①②に注目し、学ぶ意欲を評価するために次のような視点で捉えることとした。

- | |
|------------------------------|
| ①自分自身が立てためあてに対して、どのように評価したか。 |
| ②見つけた課題を次の学習で解決しようと意識しているか。 |

【図8 児童の自己評価カード】

目指すゴール	ゴールを目指すために 今日がんばることに○をしよう。	ふりかえり ◎△	反省とつぎにがんばること 先生からのアドバイス
曲のふんわりや情景を歌で表現できるようになる。	表情やしせいに気をつけて歌う。	○ → ◎	【録音を聞いた感想】 もうすこしおびきのある声を出したほうがいい のびすよ、はしかりのびすといいわ。
	せんりつのみとまり【フレーズ】を意識して、ブレスの仕方に気をつけて歌う。	○ → ◎	
	歌詞の内容や曲のふんわりからイメージした歌い方の工夫を考え、	◎ → ◎	【今日は100点満点中 何点 95点 ②】 【100点にするための次がんばること】 おびきのある声のびす
	歌詞の内容と曲のふんわり ① 声を考え、声のひびきをききながら歌う。		
	曲のふんわりにあった強弱の表現の仕方を考え、工夫して歌う。	○ → ○	【先生からアドバイス】 自分の声をしっかりききながら、口のあけ方や足のふんわり等、こまごま習ったことと実せんじせまり!! ◎が4つあったわ!!
	友達と声を聞き合ったり、教え合ったりして協力して練習する。	○ → ○	
	表現したい歌い方に近づくように、練習をくり返し、目指すゴールを達成する。	○ → ◎	

①については1回目に◎ではなかった項目の評価に注目し、2回目の評価の変化をみた。2回目の評価の変化と記述内容との関わりを【表10】にまとめた。

【表10 2回目の評価の変化と記述内容との関わり】

評価状況	2回目の評価が上がった	変化なしの項目あり	2回目の評価が下がった
人数	12人	9人	5人
記述内容との関わり	どんなことができたか、どんなことが分かったか、を具体的に記述することができていた。	「これからがんばること」の記述欄には、「ブレスの仕方が上手くいかなかったから、普段から気をつけて歌う。」「考えることができたけど、思うように強弱をつけて歌えなかったから、声の出し方をこれからも意識したい。」と、次の学習への意欲が見られた。	グループ活動での相互評価や友人との比較、ICレコーダーを活用したことによる客観的評価によって下がっていた。ただし、記述を見ると「できていないことを友達から教えてもらえてよかった。」「先生のアドバイスを生かして次の学習でも頑張りたい。」と、前向きに捉え、次の学習への意欲が高まっている内容であり、記号による評価が下がっていても、学習意欲が下がっているとは言えないことが分かった。

②については、見つけた課題を次の学習で頑張ることとして意識しているか、記述内容をみてみた。26人中21人は、見つけた課題を解決するための内容を記述しており、課題解決への意欲が見られた。ただし、5人は課題として見つけた内容とは違い、次の学習内容に対しての意欲を記述していた。次時への意欲はあるものの、見つけた課題に対しての思いは記述されていなかった。これらの記述に対しては、課題の解決方法を教師のコメント欄に記述し、具体的にどのように取り組むことがゴールを目指すために必要かを示した。

○ 抽出児童の変化の分析

抽出児童の毎時間の記述内容がどのように変化しているかにも注目した。ここでは、全4時間の題材であった「ふるさと」の学習における自己評価カードで変化をみていく。意識調査において、歌が苦手だと回答している児童Aの自己評価カードの変化を【表11】にまとめた。

【表11 児童Aの自己評価カードから抜粋】

第1次	第2次	第3次	第4次
まず、しせいから頑張れば、100点に近づける。 フレーズに気をつける。	男子の中で、意見を出すことができなかったのも、次の授業でいろんな意見を出し合いたい。	今日は、前回できなかった話合いがたくさんできたのでよかった。でも、最後の合唱が高音につられて低音が出せなかった。 しかし、フレーズに気をつけて歌えた。	話合いでいい意見を出すことができた。みんなで話し合ったら歌がよくなることが分かった。これからは、みんなに声をそろえて歌うようにがんばりたい。

記述の中に、項目の中で使われている「しせい」「フレーズ」という言葉が入っており、自分が選択したためあてを意識して振り返りをしていることが分かる。また、歌は苦手であるが、話合いの学習における自分の学習状況を振り返っており、そこで見つけた自分の課題を次時では解決できている。実際の授業の様子からもこの変化を見ることができた。

児童Aの記述の変化のように、選択したためあての項目を意識した記述や、課題解決を意欲的に図った記述がみられた児童は28人中26人であり、約9割であった。第4次の【これからがんばりたいこと】の項目には全員が自分自身の課題や学びの成果を捉え、次時の学習に対しての思いや目標を書くなど、関心意欲を高めていることを確認できる内容を記述していた。

記述内容の変化を捉えることで、自己評価が次の時間の学びにつながっているか、課題解

決の学びが継続されているかを確認することができた。また、児童の学びの継続を把握するとともに、個人の学習状況と内面にある思いも把握でき、歌いづらさを訴えていたり、技術指導を望んでいたりする児童へ個別に指導をしたり、できたことや頑張ったことの記録をもとに称賛をしたりする等、意欲的な学びを継続させる支えとすることができた。

イ 客観的な視点で自己評価を行わせるための手立て

a ICレコーダーの活用

検証授業Ⅰでは、グループ活動において自分たちの声を聴くことができ、主体的に意見を出し合い練習する姿が多く見られた。児童の記録の中に「録音を聴くことで、課題が見つかり、友達と意見を深めて練習することがスムーズにできた。」とあり、学びが深まっていく実感があったことが分かった。検証授業Ⅱでは、歌詞に込められた思いの違いを歌で表現するという課題に向け、検証授業Ⅰの学習以上にICレコーダーを活用していた。自分たちが歌声を聴いて、歌詞に込められた思いや情景が聴き手に伝わるのか、という視点で聴き比べを行っており、自己満足では終わらない練習が意欲的に続けられていた。また、題材の学習における最初の歌と最後の合唱の動画を鑑賞したことで、自分たちが学んで成長できたことを実感として捉えていた。児童の記録には、「何ができるようになったのか、どこを直さないといけないのかがはっきり分かった。」とあり、自分自身を分析して学ぶことができていたことが分かった。

b 相互評価の場の設定

「練習で頑張ったことを、他のグループの人からほめてもらえてうれしかった。次ももっとがんばろうと思った。」という記述からは、相互評価によって意欲の持続が図られていることが分かった。また、「自分ができていないことを友達が教えてくれたので、練習する時に上手に歌おうと頑張れた。」という記述もあり、相互評価をすることによって、自分では気付かなかったことに気付け、その課題解決のために活動するなど、主体的な学びにつながったことが確認できた。

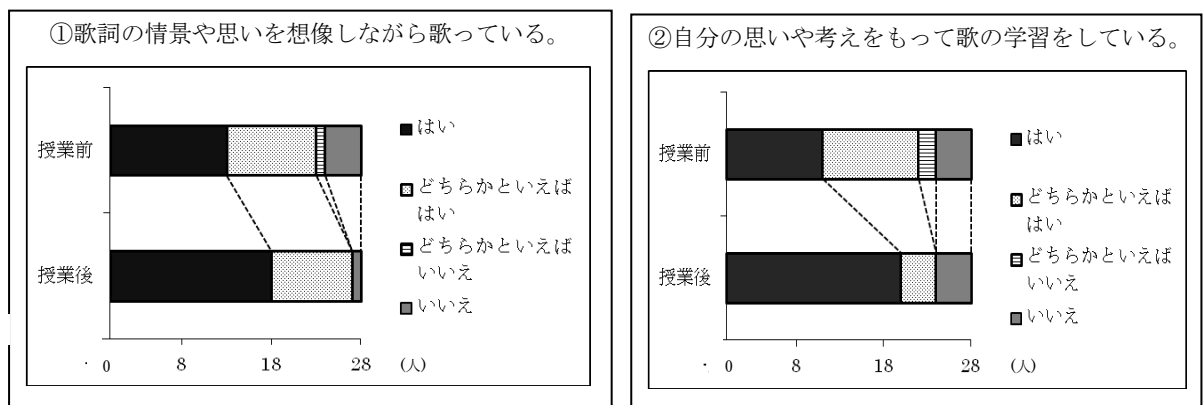
c 教師からのアドバイス

「話し合いで悩んでいた時に先生のヒントで上手に歌えるようになった。」「細かくアドバイスを書いてもらったので、とてもやる気が出た。」という内容が多く、教師のアドバイスは、児童の課題を明確にするとともに、児童の自己肯定感や意欲を高める上で効果的であると感じた。

教師が児童の学習状況を把握していたことによって、一人一人の課題に対して的確なアドバイスや称賛を練習中に行うことができた。このことによって、児童は授業のめあてだけでなく、自分自身のめあても意識しながら活動し、学ぶ意欲を持続させることができた。

(4) 意識調査の分析

検証授業Ⅰ・Ⅱの前(6月)、後(11月)で意識調査を行った。



①、②に関連する記述内容	
○	歌詞の学習から、情景や思いがイメージでき、それを表現する工夫をみんなで一生懸命考えられた。
○	これまでは歌詞が表す情景や思いを考えずに歌っていたけど、今回の学習で歌詞を考えて歌うことの大切さを知った。
○	これまでは曲の雰囲気を感じて歌っていたが、考えて歌うことで声の出し方を何度も練習して、響きを出せるようになった。
○	これまで歌詞の内容を考えずに歌っていたのが、初めて1～3番それぞれの思いが違うことが分かっている想像できた。

①、②ともに、授業の前後で肯定的な回答が増えているのが分かる。特に、②では、「はい」と回答した児童が9人増えた。記述内容から、歌詞の学習を十分行ったことで、一人一人が歌詞の情景や思いを想像しながら歌うことができ、どのような声で歌うか、どのように歌いたいのか、といった自分の思いや考えをもって歌の学習をしていたことが分かった。教師に一方的に指導されるのではなく、自分たちで表現を工夫し、課題を解決していく学習過程を提示し、実践したことが、肯定的な回答と記述内容につながっていると考える。

③歌い方や表現の仕方を友達と意見を出し合い、協力して学び合っている。		③に関する記述内容	
	<p>■ はい</p> <p>▣ どちらかといえばはい</p> <p>▤ どちらかといえばいいえ</p> <p>■ いいえ</p>	○	課題がはっきりしていて、どうしたいか考えがあったので、自分から進んで話し合いに参加することができた。
		○	友達と教え合ったり、みんなで歌って課題を見つけて練習したりして、自分では分からなかった歌い方の工夫や姿勢の大切さが分かり、もっと上手になりたいと思って練習できた。
		○	日ごろあまり話さない話し合いで、意見がたくさん出て、とても濃い内容の歌が歌えた。
		○	教え合ったり、みんなで歌って課題を見つけて練習したりしてたくさんのことを学べた。

③については、人数に大きな変化は見られなかったが、記述の内容を見ると、学び合いの質が高まったことが分かる。話し合いによる充実感や学び合いの面白さについての感想が多く、中には自分自身の成長を喜ぶ感想もあった。

①、②、③のグラフと記述内容から、主体的に歌詞の情景や思いを想像したことで、一人一人が自分の思いや考えをもつことができ、それによって学び合いの質が高まり、学びが深まったと考える。

「友達のまねたいところ」の項目の記述内容に関しては【図9】のような変化がみられた。

【図9 意識調査「友達のまねたいところ」の項目の記述の変化】

授業前		授業後	
のどがあいている	2	のどがあいている	2
口が開いている	7	口が開いている	2
口角が上がっている	1	口角が上がっている	0
表情	1	顔づくり	1
歌う時の姿勢	2	歌う時の姿勢	3
顔の形	1	顔の形	0
まゆを上げている	1	まゆを上げている	0
目の開き	1	目の開き	0
笑顔	1	笑顔	1
きれいな声	2	きれいな声	0
ひびきのある声	10	ひびきのある声	3
大きい声	3	大きい声	0
すぎ通る声	1	すぎ通る声	0
頭声的発声	1	頭声的発声	0
		高い声がきれいにひびく	4
		低い声がひびく	3
		おなかからしっかり声が出ている	2
		大人っぽい声	1
		透明な美しいひびきで声量もある	1
		音程がずれない	1
		歌の表現の仕方が分かっている	1
		楽しそうに歌っている	1
		指摘されたところを何度も練習している	1

【図9】から、学習を通して具体的な言葉の記述が増え友達を見る視点が増えたことが分かる。仲間との話し合いの中で仲間のよさを見つけられたことや自己評価カードで、自分自身がめあてをもって学習したこと、また、教師が上手な児童を紹介し、モデリングしたことが要因だと考えられる。

記述内容には、「友達と学び合ったことで、自分のできなかったことができるようになった」と、友達に教えてもらったり、まねをしたりすることで自分自身の技能が高まったと実感している児童も見られた。また、「音楽の調味料」の言葉を使った記述が増えていた。話し合いの中で児童が主体的に「音楽の調味料」の言葉を使っていたことで、知識として習得したことを用いて活用を繰り返したことになり、確実に音楽の知識として定着したと考えられる。さらに、表現の工夫についての思いや願いを互いに交流でき、より主体的な活動につながったと考えられる。

IX 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 児童による課題解決を意識した学習過程を、習得・活用・探究の学習の流れとして捉えて段階付けたことにより、児童に目指すゴールイメージを明確に示し、活動の見通しと課題意識をもって活動させることができた。
- 学習過程において、常に「音楽の調味料」〔共通事項〕を意識させたことで、児童は活動の視点を明確にし、表現の工夫において「音楽の調味料」を用いた話し合いができ、音楽的な学びを深めることができた。
- 課題解決を図る探究の活動の中で、練習中にICレコーダーで録音した声を聴きながら客観的に評価ができ、よりよい表現の工夫を求める話し合いをしたことで、何をどうすべきかが明確に捉えられ、課題解決に向けての意欲的な話し合いや練習につなげることができた。
- 自己評価カードを踏まえて計画的に既習事項の確認や新しい知識・技能の習得を行うことは、児童一人一人が課題解決に向けて習得した知識や技能を活用した話し合いや練習を主体的に行わせる上で効果的であった。
- 自己評価カードで自分自身のめあてを立てさせたことで、何ができるようになればよいか意識させることができた。自己採点は、点数を上げるために何を頑張ればよいかを考えるきっかけとなり、意欲的に学ぶ要因の一つになった。さらに、児童の自己評価に対して教師が称賛やアドバイスをすることで、児童の自己肯定感や意欲の持続、技能の向上につなげることができた。

2 今後の課題

- 学びの連続性を更に意識させるために、系統性を踏まえた知識・技能の習得と活用を計画的に行う。
- 教師の評価とさらに一体化させるために、自己評価カードの分析にルーブリック評価を用いる。
- 歌唱指導以外での評価と関連を図るために、他領域における自己評価の規準の設定を行う。
- 主体的に学ぶ力の育成を各教科と連携するために、汎用性のある自己評価カードを作成する。

参考・引用文献等

「教育課程 企画特別部会 論点整理」	(平成27年12月 文部科学省)
「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議の取りまとめ」	(平成28年8月 文部科学省)
「芸術ワーキンググループ審議のまとめ」	(平成28年8月 文部科学省)
中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」	(平成28年12月 文部科学省)
「小学校学習指導要領」	(平成29年3月 文部科学省)
「新しい学習指導要領の考え方」	(平成29年 文部科学省)
奈良教育大学 平成22年度研究成果報告HP	

《研究実践校》 宮崎市立恒久小学校